◀ 藍の花

藍はタデ科の一年草。夏に白やピンク色の小さい花を咲かせる。藍染めに使うのは、葉の部分。

藍を育ててみよう

種まきに適しているのは、北海道では4月下旬から6月頃です。

鉢に園芸用の土と腐葉土、化成肥料を入れ、種を落とし、その上に土をかけます。鉢は日当たりの良い場所に置き、毎日水を与え、ときどき追肥をします。

庭土に移し替える場合は、本葉が4、5枚になった頃、根に土を付けたまま行います。

生葉染めをしてみよう

生葉染めは、草丈が60cm程度になった頃から開花前まで行うことができます。

藍の茎を根元10cm程度残して刈り取り、葉を細かく刻んで水と混ぜ合わせて液状にします。(葉をミキサーの容器に入れ、葉全体が浸る程度に水を加えたらミキサーで攪拌します。)

それを布等で濾(こ)して染料を作ります。染めたい布を10分程度浸した後、空気にさらして酸化させます。これを2、3回繰り返して染め上げます。

素材は絹が最適(木綿や麻はよく染まらない)で、染める前に水で濡らすときれいに染まります。葉60gほどでハンカチ1枚を染めることができます。

あなただけのお気に入りの一枚を染めてみませんか?

●参考文献●

『北区エピソード史』　(昭和53年)
『続・北区エピソード史』　(昭和62年)
『エピソード・北区』　(平成19年)
～編集　札幌市北区役所～

『シノロ-百四十年のあゆみ-』　(平成15年)
～編集執筆　羽田 信三～

●協力●

篠路天然藍染協議会
篠路コミュニティセンター

■ 編集 ■

札幌市北区役所
市民部地域振興課地域活動担当
〒001-8612
札幌市北区北24条西6丁目
TEL:011-757-2400(代表)

さっぽろ市
02-Q01-22-1918
R4-2-1236

SAPPORO

発行　令和4年(2022年)10月

北区
藍(あい)の歴史をたどって

～北区、藍の歴史～

▲滝本五郎

【北区の藍栽培の祖】

北区における藍の歴史は、明治15(1882)年、徳島県から滝本五郎(たきもとごろう)を中心とする一団が、篠路村(現在の篠路や拓北・あいの里を含む一帯)に入植したことに始まる。その前年、滝本は弟の阿部興人(あべおきと)とともに開拓を目的とした団体「興産社」を創立し、北海道に大農場を作ることを志していた。

【多くの困難を乗り越え】

▲篠路村一帯で藍が栽培されていた頃の古地図

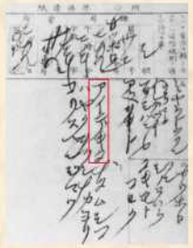
開墾は困難を極める。当時の篠路村一帯は木々や笹が密集しており、大金を投じた西洋農具は役に立たず、斧で原生林を倒し鍬を打ち込んで荒地を開拓していった。時間と人手が必要だったが、寒さと作業の過酷さに逃げ出す者もいたという。

入植した翌年は干ばつ(日照りによる水不足)、さらに予想外の災害が加わる。バッタの襲来だ。「八月十日ころ北東よりバッタ飛び来たり、農場及び茅野、笹原一帯群集し、粟、キビ、トウモロコシなどを食うことはなはだし」と滝本は徳島の弟に手紙を送っている。産卵を放っておいたら翌年大災害をもたらしてしまうため、農場中を掘り起こして卵を処分する作業で大騒ぎとなった。

また、当時はニシン漁が盛んだったため、作業員を引き抜かれ転職者が続出し、人手不足にも悩まされた。

こうして大変な苦労をしてようやくできた畑に、滝本は大豆、小豆(あずき)、大根、ソバ、トウモロコシ、そして藍を植える。

度重なる困難を乗り越え、明治16年、ついに藍の栽培に成功したのだった。



▲徳島の弟への電報には「アイデキタ」の文字が

滝本が手間のかかる藍を選んだのには理由があった。

○一つ目は、彼の故郷・徳島では、古くから藍の栽培や藍染が盛んであったこと。

○二つ目は、篠路が石狩の浜に近い立地にあり、肥料となるニシン粕が手に入れやすかったこと。

○三つ目は、藍の葉を出荷するだけで1ヘクタール(=1万㎡)当たりの収入が70円以上にもなるほど、商品価値が高かったことがあげられる。(当時の中学校や女学校の先生の月給が平均28円であったという。)

【篠路の藍が日本一の評価に】

滝本は当初、葉を徳島県に売るつもりだったが、徳島県は他県からの藍の葉の買い入れを禁止していたため、葉を「蓼(すくも)」(※)に加工しなければならなかった。すくもは藍染の原料であり、これを作るのには大変な技術と労力が必要であったことから、明治18年に徳島から技術者を雇い入れる。すくもへの加工ができることが分かった翌19年には本格的なすくも製造所を建設する。

この頃が経済的に最も厳しい時期で、滝本は小樽に出かける汽車賃すらなく、孫の小遣いから借金しなければならないほどだったという。

※「蓼(すくも)」
藍染の原料。藍の葉を乾燥させた後、水をかけて発酵させ、空気を入れる作業を約3か月間繰り返し、空気乾燥させたもの。

苦境にあったこの時期だが、藍の将来性に期待を寄せた北海道庁の補助金などにより、すくも製造所をさらに二棟新築し、藍の作付けも篠路から丘珠、札幌、白石、余市、仁木へと大きく広げることができた。

また、滝本は自ら製造方法の改良研究を進めるなどした努力も相まって、事業は好転する。

明治23年には、内国勧業博覧会という全国大会で、興産社出品の「篠路藍」の藍玉(すくもを固めたもの)が本場徳島を押さえ「一等有功賞」を獲得し、品質が日本一と認められるに至った。

【藍の衰退と受け継がれる記憶】

▲明治の頃の藍の移植作業の様子

明治20年代後半、インド産の安い輸入品に押され、日本の藍は厳しい競争にさらされる。滝本の興産社は経営の転換を図り、明治30年に操業を中止する。明治32(1899)年、滝本は札幌の自宅でその生涯を終える。享年64歳であった。彼亡き後、興産社は衰退の一途をたどり、明治37年には土地を売却して解散するところとなった。

歴史の1ページとなった藍栽培だが、1980年代に入り、興産社のあった一帯は宅地開発がスタート。新たな地名は「あいの里」となり、藍の名が受け継がれた。

また、昭和59(1984)年、北区民センターで道内初となる藍染講習会が行われ、その翌年には藍染室を備えた篠路コミュニティセンターが開館し、現在に至るまで藍染サークルに親しまれているほか、館内には藍染作品や資料が展示されている。

▲滝本五郎の報(頌)徳碑

現在も「興産社」の名は町内会の名称として残り、平成25年開校の「札幌英藍高校」では学校名と校章に「藍」が使われているなど、今も藍とその歴史は地域に根付いている。

蓼(すくも)が藍染の天然染料になるまで